

Voice 自助と共助の必要性



齋藤一公さん

北上川学習交流館「あいぼーと」事務局長

自分の身は自分で守る

いざというときは、自分で自分の身を守るしかありません。ハザードマップなどを確認して、自分の住んでいる土地の浸水のしやすさや、水害が起きたらどこに逃げるかを決めておくべきです。

正しい判断をするためには、天気や川の最新情報も重要。テレビ、インターネットやコミュニティFMなどあらゆる手段で情報を集めましょう。



伊東俊一さん

川内自主防災会 会長 (大東町大原)

普段から地域で交流を

平成27年3月、地区の一部が県から砂鉄川の浸水想定区域に指定されました。昨年の台風10号で増水したときは、以前から訓練していた経験を生かし、川内住民が一丸となって土のう300袋を川沿いに積み上げました。

高齢者世帯が多い川内のような地域は助け合いが必要。「災害時緊急見廻隊」を組織し、普段から声を掛け合っています。日頃の交流から、住民同士の信頼感が生まれています。

「いざ」というときは、自分で自分の身を守るしかない。北上川学習交流館「あいぼーと」の齋藤一公事務局長(68)はそう言い切る。「住んでいるところのハザードマップに目を通し、自分の住んでいる土地がどれだけ浸水しやすいか確認してほしい」と訴える。最新情報を入手できるインターネットやラジオなども非常時に役に立つという。川内自主防災会の伊東俊一会長(66)は「高齢者世帯が多い地域は助け合いが必要」と話し、「日頃から声を掛け合うことで、住民同士の信頼感が生まれている」と地域のコミュニケーションの重要性を強調する。

災害が規模であればあるほど、行政による救助や支援(公助)は届きにくい。特に水害の発生時は、避難が遅れることで命が危険にさらされる。自らの確かな判断で自分を守る「自助」と、家族や地域の住民同士で助け合う「共助」が、多くの命を守ることにつながる。

1 FM あすも専用ラジオ

普段は身近な地域情報を発信し、災害時は臨時番組で関連情報を伝える。避難勧告など人命にかかわる緊急の情報は、専用ラジオが自動起動して発信する。FMあすもの周波数は「79.5MHz」。

2 防災行政無線

市内に355基ある防災行政無線(屋外スピーカー)から、緊急情報や行政情報を市内全域や地域ごとに放送している。放送された内容は、無料のテレガイド(0800・800・3174)で確認できる。

3 いわて防災情報ポータル

県内に発令中の気象注意報・警報や避難情報を確認できる。川の水位や雨量を観測できる「岩手県河川情報システム」などのリンク集も。URLは「https://iwate.secure.force.com/」。

あなたと大切な人を守る

最新情報

水害から身を守るためには、必要な情報を、なるべく早く手に入れることが大切だ。最新情報を手に入るための4つの手段をピックアップ。災害が起こる前に、あらゆる方法で情報を入手しよう。

4 北上川の洪水情報メール

携帯電話各社の「緊急速報メール」で北上川で河川氾濫のおそれがある「氾濫危険水位」を超えた情報または氾濫が発生した情報を配信される。登録は不要。該当エリアには自動でメールが届く。

避難情報は「緊急度」に注目

災害が発生するおそれが高い場合に市が発信する避難情報。緊急度で名称や行動が変わる。非常時に備えて確認しておこう。

緊急度

1 避難準備・高齢者等避難開始
…高齢者の人や体が不自由な人など、避難に時間のかかる人は避難を始める。それ以外の人は避難の準備を行う。

2 避難勧告
…災害による被害発生のおそれ。対象地区の全ての人はすぐに避難する。避難場所に行くのが難しい場合は、屋内の高い場所などに避難する。

3 避難指示(緊急)
…非常に危険な状況。対象地区の全ての人は緊急に避難する。避難場所に行くのが難しい場合は、屋内の高い場所などへ緊急に避難する。

自助と共助で命を守る

「いざ」というときは、自分で自分の身を守るしかない。北上川学習交流館「あいぼーと」の齋藤一公事務局長(68)はそう言い切る。「住んでいるところのハザードマップに目を通し、自分の住んでいる土地がどれだけ浸水しやすいか確認してほしい」と訴える。最新情報を入手できるインターネットやラジオなども非常時に役に立つという。川内自主防災会の伊東俊一会長(66)は「高齢者世帯が多い地域は助け合いが必要」と話し、「日頃から声を掛け合うことで、住民同士の信頼感が生まれている」と地域のコミュニケーションの重要性を強調する。

3 危機

頻発する水害。最悪の事態に備える。



Case.1 平成20年6月岩手・宮城内陸地震

地震発生直後の厳美町市野々原地区。がけ崩れによる大量の土砂や樹木が磐井川をせき止めている



Case.2 平成14年7月洪水

砂鉄川の氾濫で大規模な冠水(東山町長坂地区)



Case.3 平成25年7月洪水

損壊したガードレールと道路(大東町積沢地区)



Case.4 平成28年10月台風10号

増水した砂鉄川(大東町大原地区)

土石流の悪夢、再び

平成20年6月14日8時43分頃、岩手県内陸南部を震源としたマグニチュード7.2の岩手・宮城内陸地震が発生した。奥州市と宮城県栗原市で最大震度6強、一関市では震度5強を観測した。厳美町の市野々原地区や産女川地区などでがけ崩れが起き、磐井川流域の5カ所で河道閉塞(※1)が発生した。

かつて、アイオン台風による豪雨では、磐井川流域で739カ所の河道閉塞が発生。せき止められた土砂や樹木が土石流となって磐井川を流下し、市街地を破壊した。悪夢を繰り返すことのないよう、一刻も早い対応が必要だった。

現代も頻発する水害

近年、本市が見舞われた大きな水害は▼平成14年7月の台風6号による洪水▼19年9月の秋雨前線による大雨▼25年7月の集中豪雨などである。特に14年の洪水では、東山地域で砂鉄川や猿沢川が氾濫し、災害救助法が適用されるほどの被害を受けた。花

野々原地区で排水ポンプの設置や仮排水路の掘削などの緊急対策を実施。産女川地区では下流の砂防堰堤の土砂を排除する工事(除石工)を行った。国などの迅速な対応により、市街地に迫った土石流の危機は寸前で回避された。

治水対策が進む現代でも、

水害は頻発している。地震など別の災害が危機の引き金になる場合もある。自然の脅威の前では、最新のダムや遊水地といえども万全ではない。川と共に暮らす私たちは、最悪の事態にいつでも備えておく必要がある。

*1 河道閉塞…地すべりやがけ崩れなどにより、土砂が川をふさいで水の流れをせき止めること。「天然ダム」や「土砂ダム」とも言われる